

東南アジア学会会報

2024 年 11 月

第 121 号

目次

第 30 期 第 4 回理事会議事録..... 4

研究集会報告：Korea-Japan Conference of Southeast Asian Studies 2024

“Searching for Southeast Asian Powers and Wisdom in the Turmoil World” 8

<KEYNOTE SPEECH>

“Sea Cucumber Matters: A Genealogy and Significance of the Studies on Southeast Asian Maritime Worlds in Japan”
Kazufumi Nagatsu 10

<PANEL 1: Diaspora, Interface, and Negotiation: Understanding the Dynamics of Southeast Asia from the Perspective of Sea Peoples>

“Mobility and Fluidity in the Maritime World: A Case of Boatbuilders in South Sulawesi, Indonesia” Tsukiko Myojo 10
“Octopus Cyanea as a New Commodity in the Southeast Asian Maritime World: Focusing on Fishing by Sama- Bajau People and Its Distribution” Makibi Nakano 10
“The “Water Frontier” since the 20th Century: Focusing on the Mekong River Basin Societies between Vietnam and Cambodia” Hisashi Shimojo 10
“Contemporary Dynamics of the Bay of Bengal Maritime World: A Case of Tamil Muslim diaspora in Malaysia” Sakine Nakajima 10

<PANEL 2: Internet and Social Media, Creating Discourses and Social Change>

“Is Political TikTok Hollowing Out the Democracy in Indonesia?” Masaaki Okamoto, Nobuaki Yagi, Genta Kuno 11
“Social Media and Internet Fundraising for the Spring Revolution of Myanmar” Jinyoung Park, Myo Hein 12
“Writing History Based on National Solidarity Image: Myanmar ‘Authority’s Arbitrary Reference to the Narrative by a Shan Activist: Htun Myint” Taihei Kikuchi 12

<PANEL 3: Finance, Investment, and Political Economy>

Macroeconomic Imbalance, External Debt, and the Financial System in Laos” Fumiharu Mieno, Kazue Demachi 13
“Forging Digital Diplomacy: Korea’s Investments in Indonesia’s Tech Sector” Zulfikar Rakhmat, Bahariviansyah Aimar Rakhmat 13
“The 2nd Doi Moi Underway: The Political System Renovation and the Future of Vietnam’s Economic Development” Yong Kyun Kim 14

<PANEL 4: Power, Knowledge and History>

“Preserving Indigenous Knowledge for Effective Disaster Management in Indonesia” Bo Kyeong Gu 14
“The Pragmatic Modernism of the Indonesian Think Tank CSIS in the New Order” Sony Karsono 15
“Counterinsurgency Era and Cold War History in Thailand” Sinae Hyun 15

<PANEL 5: Division and Distinction: The Identity Politics>

“Gating against Liberalism? Illiberal Escapism in Jakarta” Genta Kuno 16
“The Ritual of Blessing, Migration, and Ethnicity in Banda, Indonesia” Seung-Won Song 16
“Border as a Site of Interpellation and Subjectivation: Thai ‘Tourists’ Self-censorship in the Case of “#Ban Korea” Hyun-jung Chae 17

企画 東南アジア史学会賞受賞者に訊く

第 8 回（2010 年度）受賞者インタビュー 野平宗弘 18
(聞き手：藤村瞳)

短報

- “Korea-Japan Conference of Southeast Asian Studies 2024: Searching for Southeast Asian Powers and Wisdom in the Turmoil World”に参加して 菊池泰平 23
- 国際会議“The 13th International Convention of Asia Scholars (ICAS): Crossways of Knowledge”に参加して 中島咲寧 25

追悼

- 「林行夫先生 追悼集会」 小林知 27

地区活動報告	29
新入会員・住所変更など	31
事務局より	35

第 30 期 第 4 回理事会議事録

日時 2024 年 4 月 13 日（土）13:00～17:30
場所 東洋大学白山キャンパス 2 号館 3 階第 1 会議室
出席 池田一人、石井正子、岩井美佐紀、岩月純一、太田淳、岡本正明、長田紀之、小座野八光、片岡樹、菊池陽子、佐久間香子、篠崎香織、菅原由美、関恒樹、津田浩司、長津一史、西芳実、山本博之、増原綾子、丸井雅子
委任状 青山亨、伊藤友美、貞好康志、見市建

0. 定足数の確認など

- ・出席者数 24 人で定足数（16 人）を満たしていることが確認された。
- ・最初に 1 月 17 日に亡くなった生田滋元会長のご逝去を悼み、1 分間の黙祷を捧げた。

1. 報告事項**(1) 会長（長津）**

- ・特になし。

(2) 総務（長田）

- ・会報 119 号を 2023 年 12 月 6 日に発行した。現在 120 号を準備している。
- ・4 月 8 日現在の会員数は 556 名。うち一般会員 494 名、学生会員 62 名、郵送会員 11 名。前回（12 月 7 日）以来の変化は、退会 5 名、資格喪失 11 名、資格喪失からの復会 4 名であった。
- ・三島海雲学術賞に学会から 2 名を機関推薦したが両名とも不採択という連絡があった。

(3) 会計（増原）

- ・昨年 12 月総会で年会費二重請求の指摘があり、京都通信社に調査を依頼したところ、23 年度に二重請求が 25 件あったと判明した。京都通信社に対応策の提出を要請し、回答を得た。会員への報告は、学会 ML と次の総会の両方で行う。

(4) 大会（池田）

- ・特になし。

(5) 編集（西）

- ・第 53 号の貞好編集委員長のもとで刊行準備中。構成は論文 1 本、研究ノート 1 本、書評 10 本。7 月には刊行できる見込み。
- ・第 54 号は西が編集委員長を務める。9 月末締切で投稿の呼びかけを行う。
- ・昨年末の理事懇談会で議論した点について、議論を整理して編集委員会内で共有した。

(6) 学術渉外（山本）

- ・本学会が所属している学会連合体 4 つのうち、地域研究学会連絡協議会（JCASA）と人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）で会議があった。
- ・JCASA では、2023 年 12 月に総会が開催され、学会誌の投稿カテゴリーおよびインボイス制度導入後の研究集会の開催について情報共有と意見交換が行われた。そのなかで、人文社会系では他分野で論文に相当する水準の原稿が研究ノートとして扱われていることがあるように見受けられ、若手研究者のキャリア形成などを考えると「研究ノート」のカテゴリーを論文に準ずるような名称に変更することを考えてもよいのではないかなどの意見が出された。また、日本学術会議の地域研究委員会より、今期から地域研究の社会連携に焦点を当てて活動したく、JCASA を通じて加盟学協会と協業を進めたいとの呼びかけがなされた。
- ・GEAHSS では、2024 年 3 月に運営委員会が開催された。学協会におけるハラスメント防止の取り組みについて、GEAHSS による情報共有会を行う計画があることが伝えられた。本学会からは、情報共有会に参加する意思があることを伝え、本学会のハラスメント防止委員会である青山亨理事と伊藤友美理事を担当者として届けた。また、2024 年 4 月 1 日から障害のある人への合理的配慮の提供が義務化されたことに関して、加盟学協会の取り組みについて情報共有が行われた。

(7) 教育・社会連携(菊池)

- ・第2回東南アジア学会教育社会連携研究会を、田畑幸嗣会員を講師として「考古学からみた東南アジア史」のタイトルのもとで2024年1月20日にオンライン開催した。参加者は15名で、約半分は高校教員。
- ・第3回研究会は、5月25日に松浦史明会員を講師として実施予定。

(8) 情報(岩月)

- ・ホームページ上の研究集会のページの設計について、担当の理事と協議して作成中。

(9) 地区例会担当

① 北海道・東北地区(佐久間)

- ・2月24日に東北学院大学でハイブリッド開催した。15名が参加。

② 関東地区(丸井)

- ・特になし。

③ 中部地区(小座野)

- ・特になし。

④ 関西地区(菅原)

- ・1月27日に大阪大学でハイブリッド開催した。

⑤ 中国・四国地区(関)

- ・2月17日に広島大学でハイブリッド開催した。約20名が参加した。

⑥ 九州地区(篠崎)

- ・2月18日に北九州市立大学で対面のための公開研究会として例会を開催した。16名参加。

⑦ 地区例会全体(篠崎・佐久間・菅原)

- ・地区例会全体としての報告として、3月21日に修論・博論発表会をオンライン開催した。修論12本、博論3本の報告のプログラム(ただし、1名当日体調不良のため欠席)。修士の非会員の報告者が多く、本企画は学会の裾野を広げるのに貢献していると思われる。例会の慣例にしたがって、すべての報告にコメントーターをつけた。ある博論報告者からはコメントーターをつけるよりも議論する時間を多くとってほしいとの意見が寄せられたが、修論・博論発表会の主旨は若手研究者の簡単な自己紹介にあるので、深く議論をしたければ

地区例会の場を利用するのが適当と思われる。これについては今後、例会担当で修論・博論発表会の反省会を開き、改めて議論する。

- ・地区例会発表者の募集を3月6日に会員MLで行った。オンラインと対面の両方で募集する。

(10) 会長代行(岩井)

- ・特になし。

(11) ハラスメント防止(青山)

- ・特になし。

2. 審議事項

(1) 第106回研究大会について

- ・津田大会理事より、第106回大会は、12月7日(土)・8日(日)に大阪大学箕面キャンパスで前回・前々回と同様に「対面を重視したハイフレックス」で実施すること、および同大会の募集要項・シンポジウム案が提案され、承認された。

- ・前回に引き続き開催するOpenSEAに関して、応募者が発表形式として①ポスター発表のみ、②ライトニングトークのみ、③両方のいずれかを選べることにするか、あるいは②のみの応募は認めないことにするか、意見交換がなされた。今後、大会担当で引き取って決定する。

- ・シンポジウムは、大会校企画で「複言語・複文化共存社会の現状と課題：日本のなかの東南アジア」と題し、大阪大学の複言語・複文化共存社会研究センター(ふくふくセンター)の協力を得て実施する。

- ・大会理事より、第106回大会では託児サービスの案内の強化に向けて努力する旨が述べられた。

- ・大会理事より、大会担当の職務負担の軽減のために、当初の予算策定時の想定を超えるアルバイトの採用が提案され、アルバイト採用の方針については承認された。今後、費用の見積もりを経て大会理事と会計理事のあいだで調整を進めることとされた。

(2) 研究集会について

・岡本大会理事より2件の提案がなされ、承認された。1件目は「ベトナムの少数民族言語政策と言語使用の実態」で、11月の開催、7名の発表者を予定。2件目は国際研究集会であり、従来は京都大学東南アジア地域研究研究所と韓国の東南アジア学会が交互に開催してきたものに今回は学会として参加する。8月末に釜山で開催される韓国東南アジア学会にパネルを1つと自由発表4名を出す予定。

・岡本大会理事より、3件目として、前年に逝去された池端雪浦先生の追悼シンポジウム企画も提案された。企画の詳細が未定のため、今回の理事会では東京外国語大学との共催のかたちで開催する方針のみを承認し、予算などの詳細は今後、関係理事で調整した後、改めて理事会に提案することとした。

(3) 繰越金について

・前述の大会でのアルバイト費用など、年度の予算を超える支出も、理事会が必要と判断した場合には認められることが確認された。

・長津会長より、今期中に学会の資産状況や毎年の収支について確認したうえ、繰越金の用途に関する提言を作成し、次期へ申し送ることが提案され、承認された。

(4) 東南アジア史学会賞について

・前期理事会からの申し送りを受けて、学会賞の顕彰対象とされる「少壮研究者」の定義を明確化すべきかどうか、明確化するとすればどのような基準を設けるか、について議論した。2007年の規程改正で、対象を広げるために、それ以前に存在した「原則として40才まで」という年齢制限を撤廃した経緯があったことを確認した。今期では規程の改正は行わないこと、応募要項に対象となりうるケースを列挙するなどの運用面で間口の広さを示すのが良いだろうという意見を次期への申し送りとすることが確認された。また、学会賞の選考対象とするかどうかの判断は、選考委員会が行うこととし、選考委員会で判断でき

ない場合には会長が判断を下すことが確認された。

・2人同時受賞の場合に副賞を折半としてきた慣例の是非について議論し、今期も従来通りの運用とすることとした。この慣例の背景に、学会賞の財源に限りがあるため、1年の支出額を定めることで長く継続させる意図があったことが確認された。

・ある理事から、賞の名称「東南アジア史学会賞」を、現学会名に合わせて「東南アジア学会賞」に変えてはどうかという意見が出た。

・既存の学会賞とは別に新しい賞を設けることについて議論し、今期での議論を次期へ申し送ることとした。「少壮研究者」に限定しないシニア研究者のための賞や、書籍でなく論文を対象にした賞など。論文賞については、審査員による判断が難しい、会誌への投稿が少ない現状では非現実的である、といった反対意見が出た。

(5) 会誌の論文カテゴリー改編について

・長津会長より、現行の「研究ノート」のカテゴリーを「〇〇論文」などの名称に変更してはどうかという提案がなされた。議論の結果、投稿数の減少という事態に対処するためには、単に論文カテゴリーを改編するだけでなく、会誌の刊行スケジュール見直しなどの問題も視野に含める必要があることが確認され、これらを総合的に検討するためにワーキンググループを立ち上げるという方針が決まった。

(6) 学会年度の変更について

・長津会長により、学会年度を1月始まりから4月始まりに変更することについて、各担当からの意見が求められた。10月の次回理事会までに担当ごとに、年度変更のメリット・デメリットを箇条書きで書き出し、そこで意見集約をして、次期への提言をまとめることとした。

(7) 2022年度会計決算報告（訂正版）および2023年度会計決算報告について

・増原会計理事より、2022 年度会計決算報告
訂正版および 2023 年度会計決算報告につい
て提案がなされ、承認された。

研究集会報告：Korea-Japan Conference of Southeast Asian Studies 2024 “Searching for Southeast Asian Powers and Wisdom in the Turmoil World”

2024年8月31日に、韓国東南アジア学会などとの共催で、Korea-Japan Conference of Southeast Asian Studies 2024 “Searching for Southeast Asian Powers and Wisdom in the Turmoil World”をハイブリッド開催した。当初は韓国の釜慶大学校（釜山）で開催予定であったが、大型台風の影響で、日本側の参加者は急遽オンライン開催となった。

本学会としては4回目の研究集会の開催であり、外国の東南アジア研究の学会との共催として研究集会を開催するのは初めてのことであった。

共催機関には、本学会(JSSEAS)と韓国東南アジア学会(KASEAS)のほか、日本の京都大学東南アジア地域研究研究所(CSEAS)と、韓国の全北大学東南アジア研究所(JISEAS)、東亜大学 ASEAN 研究所(DIAS)、釜慶大学グローバル・アンド・エリア・スタディーズ研究所(IGA)、釜山外国語大学韓国 ASEAN 研究所(KIAS-BUFS)、釜慶大学 Global BK、*TRaNS: Trans -Regional and -National Studies of Southeast Asia* (西江大学東アジア研究所)が名を連ねた。

研究集会のプログラム、および抄録は以下の通りである（敬称略）。

プログラム

2024年8月31日(土) オンライン開催
9:00-9:50

Opening

Moderator: Jinyoung Park (JISEAS)

- Welcome: Je Seong Jeon (President, KASEAS)
- Opening: Fumiharu Mieno (Director, CSEAS)
- Keynote “Sea Cucumber Matters: A Genealogy and Significance of the Studies on Southeast Asian Maritime Worlds in Japan”

Kazufumi Nagatsu (President, JSSEAS/ Toyo University)

10:00-12:00

Panel 1: Diaspora, Interface, and Negotiation: Understanding the Dynamics of Southeast Asia from the Perspective of Sea Peoples

Moderator: Kazufumi Nagatsu (Toyo University)

- “Mobility and Fluidity in the Maritime World: A Case of Boatbuilders in South Sulawesi, Indonesia”

Tsukiko Myojo (JSPS/Toyo University)

Discussant: Sun-kee Hong (Mokpo National University)

- “Octopus Cyanea as a New Commodity in the Southeast Asian Maritime World: Focusing on Fishing by Sama- Bajau People and Its Distribution”

Makibi Nakano (Toyo University)

Discussant: Kyungmuk Lee (Jeonbuk National University)

- “The “Water Frontier” since the 20th Century: Focusing on the Mekong River Basin Societies between Vietnam and Cambodia”

Hisashi Shimojo (Kobe University)

Discussant: Heejin Han (Pukyong National University)

- “Contemporary Dynamics of the Bay of Bengal Maritime World: A Case of Tamil Muslim diaspora in Malaysia”

Sakine Nakajima (Kyoto University)

Discussant: Seok-Joon, Hong (Mokpo National University)

13:30-15:30

Panel 2: Internet and Social Media, Creating Discourses and Social Change

Moderator: Jangsik Park (Dong-A University)

- “Is Political TikTok Hollowing Out the Democracy in Indonesia?”

Masaaki Okamoto (Kyoto University),

Nobuaki Yagi (Kyoto University), Genta Kuno (Kyoto University)

Discussant: Jeonghun Park (Busan National University)

- “Social Media and Internet Fundraising for the Spring Revolution of Myanmar”

Jinyoung Park (JISEAS), Myo Hein (Seoul National University)

Discussant: Genta Kuno (Kyoto University)

- “Writing History Based on National Solidarity Image: Myanmar ‘Authority’s Arbitrary Reference to the Narrative by a Shan Activist: Htun Myint”

Taihei Kikuchi (Kyoto University)

Discussant: Kihong Mun (Pukyong National University)

Panel 3: Finance, Investment, and Political Economy

Moderator: Yeonsik Jeong (Changwon National University)

- “Macroeconomic Imbalance, External Debt, and the Financial System in Laos”

Fumiharu Mieno (Kyoto University), Kazue Demachi (Kyoto University of Foreign Studies)

Discussant: Yohan Lee (Busan University of Foreign Studies)

- “Forging Digital Diplomacy: Korea’s Investments in Indonesia’s Tech Sector”

Zulfikar Rakhmat (Busan University of Foreign Studies), Bahariviansyah Aimar Rakhmat (Researcher)

Discussant: Heeryang Ra (Pukyong National University)

- “The 2nd Doi Moi Underway: The Political System Renovation and the Future of Vietnam’s Economic Development”

Yong Kyun Kim (Seoul National University)

Discussant: Fumiharu Mieno (Kyoto University)

15:40-17:40

Panel 4: Power, Knowledge and History

Moderator: Woonkyung Yeo (Seoul National University)

- “Preserving Indigenous Knowledge for Effective Disaster Management in Indonesia”
- Bo Kyeong Gu (Busan University of Foreign Studies)

Discussant: Tsukiko Myojo (Toyo University)

- “The Pragmatic Modernism of the Indonesian Think Tank CSIS in the New Order”

Sony Karsono (Hankuk University of Foreign Studies)

Discussant: Masaaki Okamoto (Kyoto University)

- “Counterinsurgency Era and Cold War History in Thailand”

Sinae Hyun (Sogang University)

Discussant: Hisashi Shimojo (Kobe University)

Panel 5: Division and Distinction: The Identity Politics

Moderator: Dong-Yeob Kim (Busan University of Foreign Studies)

- “Gating against Liberalism? Illiberal Escapism in Jakarta”

Genta Kuno (Kyoto University)

Discussant: Jeehun Kim (Inha University)

- “The Ritual of Blessing, Migration, and Ethnicity in Banda, Indonesia”

Seung-Won Song (Hankuk University of Foreign Studies)

Discussant: Makibi Nakano (Toyo University)

- “Border as a Site of Interpellation and Subjectivation: Thai ‘Tourists’ Self-censorship in the Case of “#Ban Korea””

Hyun-jung Chae (Duksung Women’s University)

Discussant: Sakine Nakajima (Kyoto University)

抄録

KEYNOTE SPEECH

“Sea Cucumber Matters: A Genealogy and Significance of the Studies on Southeast Asian Maritime Worlds in Japan”

Kazufumi Nagatsu (President, JSSEAS/ Toyo University)

In 1814, the British navigator Matthew Flinders encountered the Makassan in the Gulf of Carpentaria in northern Australia. Makassan was the collective name for a group of sea peoples from the island of Sulawesi and the surrounding regions (part of present-day Indonesia). The Makassans harvested sea cucumbers on the coast to be dried, processed, and exported to China. Thus, by the early 19th century, the sea peoples had reached every corner of Southeast Asian seas, even the coast of Australia, in search of specialty marine or forest products, including sea cucumbers; these natural products have been long-lasting global commodities in Southeast Asia.

In Southeast Asian studies, the “Southeast Asian maritime world” roughly encapsulates a socio-cultural ecosphere that spans the Southeast Asian islands and littorals. The movements of the sea peoples, driven by the search for, gathering of, and trade in the global commodities mentioned above, provide a key to understanding the formation and continuing vitality of this maritime world.

In Japan, studies of this maritime world have paid much attention to its borderless and fluid nature, criticizing a view of the humanities and social sciences that presumes nation-states as a frame of reference. These studies have also brought to the forefront social elements typically confirmed among the sea peoples, like mobility, fluidity, or hybridity, which Japan’s conventional humanities and social sciences have long overlooked. I assume that the sea peoples have maintained a

vernacular type of ethnic symbiosis based on such social mobility, fluidity, or hybridity.

With a focus on the socio-historical dynamics and mobility of sea peoples, my speech aims to trace the genealogy of the studies on the “Southeast Asian maritime world,” review their ideological background, and reassess their academic significance in Japan. Southeast Asian studies in Japan have helped to relativize rigid and static understandings of their own societies. I hope that this experience might serve as a reference for the academic development of Southeast Asian studies in Korea and other East Asian countries.

PANEL 1: Diaspora, Interface, and Negotiation: Understanding the Dynamics of Southeast Asia from the Perspective of Sea Peoples

“Mobility and Fluidity in the Maritime World: A Case of Boatbuilders in South Sulawesi, Indonesia”

Tsukiko Myojo (JSPS/Toyo University)

“Octopus Cyanea as a New Commodity in the Southeast Asian Maritime World: Focusing on Fishing by Sama- Bajau People and Its Distribution”

Makibi Nakano (Toyo University)

“The “Water Frontier” since the 20th Century: Focusing on the Mekong River Basin Societies between Vietnam and Cambodia”

Hisashi Shimojo (Kobe University)

“Contemporary Dynamics of the Bay of Bengal Maritime World: A Case of Tamil Muslim diaspora in Malaysia”

Sakine Nakajima (Kyoto University)

This panel will present the latest research by

Japanese scholars on the “Southeast Asian maritime world,” a socio-cultural ecosphere encompassing the islands and littorals of Southeast Asia that are intimately connected by the sea. Scholars of Southeast Asian Studies share the consensual understanding that the historically recurring migratory movements of sea peoples linked the islands and littorals economically and socio-culturally, facilitating the formation of this unique historical geobody. Here, we briefly define sea people as a prototypical group formed on the basis of the ecological environment of the Southeast Asian maritime world, i.e. an archipelagic terrain where tropical seas and rainforests are of dominant trait. The speakers will discuss the socio-historical dynamics of these sea peoples, drawing on their recent fieldwork in Vietnam, Cambodia, Malaysia, and Indonesia. The discussions will shed light on the migration or diaspora of sea peoples, the interface between them and neighboring societies, and their negotiation with the outside global world.

Dr Myojo discusses the patterns of mobility and fluidity of the Konjo boatbuilders of South Sulawesi, renowned for their construction of large wooden boats such as the Pinisi. Her ethnographic study provides a detailed insight into how these craftsmen work in and move between different locations across South Sulawesi and Indonesia, constantly seeking new boat-building opportunities through their ethnic and inter-ethnic networks.

Dr Nakano analyses recent changes in the fishing activities and mobility of the Sama-Bajau, one of Southeast Asia's most emblematic groups of seafarers. Drawing on recent fieldwork in the Banggai Islands of eastern Indonesia, she highlights how the Sama-Bajau have flexibly reorganized their fishing practices and mobility in response to the demands of local, national, and global markets over the past decade.

Focusing on the ethnic hybridity, social fluidity, and informal economies that have emerged in the Mekong River Basin, Dr. Shimojo argues that the “intangible spaces” of the states straddling Vietnam and Cambodia expanded in the late twentieth century and that these spaces have been subject to state intervention since the twenty-first century.

Ms. Nakajima examines the historical continuity of the maritime world of the Indian Ocean with a particular focus on the contemporary diaspora of the Tamil Muslim migrants in Malaysia. Her study shows that maritime networks, which refer to the complex web of trade, cultural exchange, and migration routes that historically spanned the Indian Ocean, continue to serve as the foundation of the Indian Ocean maritime world, transcending modern nation-state boundaries.

PANEL 2: Internet and Social Media, Creating Discourses and Social Change

“Is Political TikTok Hollowing Out the Democracy in Indonesia?”

Masaaki Okamoto (Kyoto University)

Nobuaki Yagi (Kyoto University)

Genta Kuno (Kyoto University)

The rapid technological development has constantly introduced new tools for the elections all over the world. Social media has been changing the electoral landscape since the start of the 21st century. Textual social media such as Facebook and Twitter has been politicized, and then came visual social media such as Instagram and YouTube. In the 2010s, AI and big data became the electoral tools for micro-targeting and precise election result prediction. In the late 2010s, the new political tools emerged: TikTok and Generative AI. The Indonesian presidential election in 2024 was the first time when TikTok and Generative AI were utilized in

the Indonesian election. This paper focuses on how TikTok was used in the election in Indonesia.

A Chinese-origin TikTok is a short video application mainly targeted at the younger generation. TikTok has become one of the most popular social media since its birth in 2017 because anyone can easily make funny dance videos, and its superb algorithm provides users with videos tailored to his/her interests. TikTok was just for fun and apolitical at first, but politicians found its political usefulness, and its politicization soon started. Politicians and their supporters have created their own political TikTok during the campaign. However, most content is neither about the politicians' platforms nor their visions and missions. They are casual, light, funny, and not substantial. In that sense, political TikTok is, according to some scholars, uniquely for politainment.

This paper analyzes the strategies of presidential election campaign teams on TikTok, quantifies the use of TikTok in the election, and evaluates the meaning of the emergence of short videos on the progress and decay of democracy in Indonesia.

“Social Media and Internet Fundraising for the Spring Revolution of Myanmar”

Jinyoung Park (JISEAS)

Myo Hein (Seoul National University)

Everything needs money. It is also true for the Spring Revolution, named for the struggles of people in Myanmar against the military junta after the February 2021 coup d'état. While international communities have been reluctant to intervene in civil-war-like situations in Myanmar or to support the anti-military groups financially, it is mostly Myanmar people, both locals and diasporas, who have been bolstering the over three-year

resistance movement, including military actions. This study explores the innovative funding methods used by anti-military groups to finance the resistance movement. The National Unity Government (NUG), a parallel government formed by opposition lawmakers, has been using innovative and tech-savvy ways, from real estate auctions to cryptocurrencies, and diaspora communities have added their undeclining fundraising efforts with creative means mostly through the internet. As a result, the anti-military groups have raised hundreds of millions of dollars, which may not be enough to cover all the expenses but big enough to encourage them to continue their fights. This paper argues that while the internet and social media are essential for their fundraising drives, the success's core connects the participation and ownership of the movement with donation.

“Writing History Based on National Solidarity Image: Myanmar ‘Authority’s Arbitrary Reference to the Narrative by a Shan Activist: Htun Myint”

Taihei Kikuchi (Kyoto University)

This presentation examines the process of molding the official history of the Panglong Conference, which was held in February 1947 in Myanmar. According to the history shaped by the Burma Socialist Programme Party (BSPP), the Burmese nationalist leader Aung San and the minority representatives agreed to establish the union state. Hence, “Panglong” is interpreted as the symbol of national solidarity today. While the BSPP used the above history to appeal its legitimacy, it viewed the military as a guardian of the multiracial country. The “national solidarity” image of the Panglong Conference was reinforced under restricted freedom of speech. During the critical moment of the 8888 uprising, the Committee for the Compilation

of Authentic Facts of Myanmar History again edited the history of the Panglong Conference. To make history more inclusive and to base it on the “national solidarity” image, the Committee used the narratives of various people who joined the event.

Htun Myint was one of them. He founded the Shan State Freedom League, and he referred to the Panglong Conference as a means of requesting minorities' rights after Independence. From 1953 to 1961, he published five political pamphlets. He first wanted equal rights among the Shan people, criticized the hereditary Shan Chiefs' governing system as feudalism, and demanded that it be abolished. However, his focus changed to political and economic inequality between Burma Proper and the Shan State. He pointed out the disadvantages of the Shan State in terms of natural resources and its budget. To solve them, Htun Myint called for the realization of the federal system.

However, the Committee for the Compilation of Authentic Facts of Myanmar History hid Htun Myint's political views and accepted only those parts of his narrative that supported their position.

The Committee, which compiled the history under the direction of SLORC, drew a more empirical history by referring to the narratives of Shan activists who were concerned with the Panglong Conference. By collecting testimonies from people involved in the Shan State Freedom League, the image of ethnic minorities willing to proactively participate in the Union of Myanmar was created. At this time, the Shan State Freedom League's political movement was interpreted as highly simplified. The historical account of the Panglong Conference under the junta's rule only included the Htun Myint's desire to join the Union. It omitted the purpose of the narrative, historical background, and specific

arguments. In this way, an image of a history of national unity was formed that legitimized the rule of the military while claiming national reconciliation and ignoring Htun Myint's essential claims.

PANEL 3: Finance, Investment, and Political Economy

Macroeconomic Imbalance, External Debt, and the Financial System in Laos”

Fumiharu Mieno (Kyoto University)

Kazue Demachi (Kyoto University of Foreign Studies)

External public debt exacerbation and macroeconomic destabilization in Laos are attributed to the subsequent complications of excessive foreign capital investments in the mining, power, and transport infrastructure sectors during the economic boom of the 2010s. This study examines the Lao economy from three perspectives: real sector growth, the characteristics of external fundraising, and the domestic financial system. Our findings suggest that the external debt issue still appears to be under control, real sector growth is expected to be strong in the medium term, and the less-developed financial system has not realized its potential for fiscal financing and macroeconomic stability.

“Forging Digital Diplomacy: Korea’s Investments in Indonesia’s Tech Sector”

Zulfikar Rakhmat (Busan University of Foreign Studies)

Bahariviansyah Aimar Rakhmat (Researcher)

This paper explores the burgeoning relationship between Indonesia and Korea within the context of digital investments and technological collaboration. Since the establishment of diplomatic ties in 1973, the

partnership between Jakarta and Seoul has evolved significantly, with a particular focus on enhancing bilateral trade and investment. In recent years, the digital sector has emerged as a key area of cooperation, with Korea making substantial investments in Indonesia's digital infrastructure. This article delves into Korea's investments in Indonesia's digital sector, analyzing the strategic motivations behind these investments. It also highlights the potential for future collaborations and outlines recommendations for strengthening the partnership. Through an in-depth examination of digital diplomacy, major investments, and strategic drivers, this paper provides valuable insights into the evolving Indonesia-Korea relationship in the digital age.

“The 2nd Doi Moi Underway: The Political System Renovation and the Future of Vietnam’s Economic Development”

Yong Kyun Kim (Seoul National University)

In this paper, I articulate the following arguments concerning the political economy of Vietnam's economic development. 1) Vietnam stands at a critical juncture, facing the looming risk of falling into a middle-income trap unless it successfully renovates its political system. 2) Since 2013, the Vietnamese Communist Party (VCP) has initiated a crucial political system reform known as “building and correcting the Party.” This reform endeavors to augment the Party's governance capabilities and modernize the state's administrative framework, aligning with the essential needs of Vietnam. 3) Vietnam must persist in its endeavors to renovate the political system, concurrently steering its trajectory towards striking a balance between state capacity on one hand and upholding the principles of the rule of law and democratic accountability on the other. 4) The realization of four distinct futures hinges on

the outcome of Vietnam's pursuit of these dual dimensions of reform direction. Depending on whether Vietnam successfully attains both, either, or none of these objectives, the nation's future trajectory will be determined.

PANEL 4: Power, Knowledge and History

“Preserving Indigenous Knowledge for Effective Disaster Management in Indonesia”

Bo Kyeung Gu (Busan University of Foreign Studies)

As a disaster-prone country, Indonesia has long been familiar with natural hazards. Even before advanced technology arrived, our Indonesian ancestors developed their own ways to prevent and mitigate disasters — and to live in harmony with natural hazards. This local wisdom has been passed through generations and still remains effective.

Before scientific discussions for disaster mitigation existed, Indonesian society applied local wisdom, or the knowledge of Adat, to mitigate disasters, and houses are one of the important disaster management factors. Indonesia's “Rumat adat” is a traditional house built in the style of an indigenous building and is built with wood, bamboo, wooden nails, and light natural materials to prepare for disasters in accordance with traditional laws, taboos, myths, and religion. The roof is easily available, and coconut and sugar cane leaves are used and designed to tilt steeply, which will cause less casualties even if it flies or collapses in a typhoon, allowing heavy rain to fall quickly. To prepare for floods and heavy rain, a stone or pile of mud is used as a support and a pillar is erected high on it, emptying the first floor, and living on the second floor.

One example of local wisdom that is still being well implemented today to prevent disasters can

be found within the Baduy community in West Java, Indonesia. Despite the numerous natural hazards in the area, there are no recorded flooding events. Furthermore, there is very little — if any — recorded building damage when earthquakes have occurred. This is due to a strict local regulation — known as *pikukuh* — that the community enforces amongst its members. In addition, various traditional disaster response methods exist, such as *Rumah Gadang* of Minangkabau people in Sumatra, *Tongkonan* of Toraja people in Sulawesi, and *Rumah Baluk* of the *Bidayuh*(Dayak) people in Kalimantan.

Local wisdom can be applied as an effective instrument to undertake hazard and disaster in many communities. This study aims to prove the usefulness of this knowledge in disaster risk reduction through case studies conducted with indigenous cultures. In addition, in order to protect the disappearing indigenous culture, the direction of support through cultural development cooperation will be considered.

“The Pragmatic Modernism of the Indonesian Think Tank CSIS in the New Order”

Sony Karsono (Hankuk University of Foreign Studies)

As far as public discourse about society is concerned, the once-popular keywords “modernity” and “modernization” have become *passé* in 21st-century Indonesia. Yet, while the general public and decisionmakers have stopped preoccupying themselves with these concepts, they continue to be caught up in the impact of the great transformation that the concepts describe: capitalist industrialism, globalization, mass political participation, mass-urbanization, and mass-culture. This constellation of modernity continues to produce (to borrow the words of Susan Buck-Morss) “dreamworld and catastrophe.” This

study offers to bring into a dialog two sets of data: 1) ideas about and practices of modernity/modernization as developed and propagated in the 1970s by the Center for Strategic and International Studies (CSIS), and 2) the actually-existing manifestations of modernity in 21st-century Indonesia. Taking its methodological inspiration from Walter Benjamin’s “history as montage,” this study pursues two goals: 1) to understand what it means for contemporary Indonesians to experience the dreamworld and catastrophe of Indonesia’s modernity in 1966-2024, and 2) to strip Indonesia’s contemporary history of its illusions; to retrieve and keep alive the old, forgotten aspirations for human emancipation; and to explore new ways of transforming the world into a better place, going beyond the “blueprints for modernity” offered by liberal democracy, communism, and fascism.

“Counterinsurgency Era and Cold War History in Thailand”

Sinae Hyun (Sogang University)

It has been widely accepted that the anticommunist counterinsurgency era in Thailand began in 1965 after the outbreak of the so-called “Gun Firing Day.” Marking 1965 as the beginning of the Thai counterinsurgency era essentially shows the two conventional views centered on the Thai military and the Thailand-U.S. relations in Thailand’s Cold War historiography. This presentation therefore reviews the Cold War-related literature produced by Thai and foreign scholars to understand the key trends of Thailand’s Cold War studies and how they have affected the perception of the Cold War in Thai historiography, especially regarding the Thai counterinsurgency era. After a brief review of the Thai Cold War studies produced during and after the Cold War by Thai and foreign

scholars, the ensuing part examines the discourses around the Thai counterinsurgency era. Based on these surveys, I will argue that Thailand's Cold War history needs to be indigenized to broaden the scope of Thailand's Cold War historiography and invite more diverse research on the period.

PANEL 5: Division and Distinction: The Identity Politics

“Gating against Liberalism? Illiberal Escapism in Jakarta”

Genta Kuno (Kyoto University)

The global spread of gated communities, which introduce privatized housing complexes, has been criticized for encroaching on urban public space. One of the most explicit illiberal consequences of the proliferation of gated communities in a city is increased exclusivism and socio-political conservatism. In Western cities, some evidence suggests that those living in gated communities tend to become conservative. In Indonesia, the surge in developer-constructed housing estates since the late 20th century has reinforced segregation in Jakarta and nearby areas. A pertinent development in the 2010s has been the emergence of Islamic housing complexes. Notably, in Jakarta, the trend of forming gated communities is not confined to the affluent or those residing in private estates; rather, it also encompasses the economically disadvantaged and kampung dwellers, who are also creating their own segregated spaces through barriers and additional security devices as can be found in affluent gated communities. Given this cross-class nature of urban gating in the city, the underlying links between gated collectivism and moral conservatism in Jakarta requires reinvestigation. This presentation directly examines the relationship between

spatial patterns of residential street barriers and socio-political attitudes of residents based on voting behavior as well as permissiveness toward cohabitation in recent years.

“The Ritual of Blessing, Migration, and Ethnicity in Banda, Indonesia”

Seung-Won Song (Hankuk University of Foreign Studies)

This research analyzes how the Cuci Parigi ritual in the Banda Islands in Maluku, which takes place approximately every ten years, reflects the Austronesian concept of the authority and power between indigenous and migrant populations. Across Austronesian regions, the high "mobility" of people has played a central role in shaping their social structures. This resulted in a recurring pattern that indigenous (ancestral) clans relinquish political power and influence to the migrant population. The Banda Islands, known for their nutmeg, came under Dutch control in 1621, which resulted in the forced migration of the indigenous population to other regions. This made the migrant laborers become the dominant group in the society. However, indigenous people continued to be recognized as “landowners” and were revered as ancestral spirits, the sources of blessings. Later waves of immigrants felt obliged to perform rituals dedicated to these indigenous spirits to ensure the prosperity of their crops and protection from natural disasters. In Banda, even though the indigenous population disappeared following Dutch domination, it is believed that the ancestral spirits of the indigenous people, known as Datu, persistently watch over the island. As such, Banda's immigrant communities continue to perform the Cuci Parigi ritual at the sacred well, believed to be the abode of the spirit of Datu. The ritual highlights that the power dynamics between indigenous

and immigrant populations remain relevant in contemporary Banda. The indigenous authorities vanished from the material world, yet their spiritual significance endures, showing active interaction between historical reality and local memory.

“Border as a Site of Interpellation and Subjectivation: Thai ‘Tourists’ Self-censorship in the Case of “#Ban Korea””

Hyun-jung Chae (Duksung Women’s University)

At the end of October 2023, the trending hashtag on X in Thailand was #ban korea (#แบนเที่ยวเกาหลี). Some tourists travelling from Thailand to South Korea were repatriated after failing to pass immigration, and their experiences of entering Korea and being inspected in so-called cold rooms ('hong yen') were shared on social media, leading to widespread anti-South Korean sentiment and a boycott of travel to South Korea. On the surface, the hashtag boycott seems to reveal mutual hostility and nationalistic antipathy between Thai and Korean social media users, but what it also reveals is that the narratives about and suggestions for responding to Korean immigration inspection have become a process of self-censorship and self-reflection on Thai people's own socio-economic position. To conduct this research, I collected posts and reviews on Facebook, X, and YouTube from 2019 to the end of 2023, when the hashtag became controversial on the social media, and interviewed 10 Thais who had travelled to South Korea and were repatriated or investigated in Hong Yen. Based on the online and interview data, I analyse how Thais' experiences of entering South Korea narrow their perceptions of the Thai-South Korean relationship to the problem of illegal migration. As a result, they reproduce the

social index of the little ghosts (phi noi), illegal Thai labour migrants in South Korea, and create narratives that distinguish themselves from them. In doing so, I argue that the process of subjecting Thai travellers to rigorous immigration scrutiny in South Korea not only has negative diplomatic consequences for South Korea and Thailand, but also reinforces perceptions of regional and economic inequalities and distinctions within Thailand.

企画 東南アジア史学会賞受賞者に訊く

この企画はこれまでの東南アジア史学会賞受賞者に受賞後のキャリアを振り返っていただき、ご経験を共有させていただくことで後進研究者のキャリア形成のヒントにしたいという意図から立ち上げたものです。2010年度（第8回）に受賞された野平宗弘会員にインタビューを受けていただきました。

第8回（2010年度）受賞者インタビュー

回答者：野平宗弘会員
（聞き手：藤村瞳）

Q.2010年に『新しい意識：ベトナムの亡命思想家ファム・コン・ティエン』（2009年）にて東南アジア史学会賞を受賞されて以降のご活躍の一つに、二冊の翻訳書の出版——『深淵の沈黙』（東京外国語大学出版会、2018年）および『新しい意識』（東京外国語大学出版会、2022年）——が挙げられます。ファム・コン・ティエンの著作を翻訳するというアイデアは元々温めてこられたのでしょうか。それとも、より最近のご活動をとおして構想が始まったのでしょうか。

A. 実はこの二冊の前に井筒俊彦の英文著作を翻訳したこともあるのですが、ファム・コン・ティエンに限ってお話しますと、この翻訳への関心というのはずっと前からあったといえます。ファム・コン・ティエンを研究している時から訳し溜めてきたものがあり、それをまとめて出版したというかたちです。私の場合が一番自分で深く考えられるのは母語の日本語ということがあります。特に思想についての研究となるとやはり難しいので、その著作なり作品を日本語に翻訳し、日本語でまず考える。それから、さらに原著と突き合わせて訳文が正しいか検証しながら、研究を進めていきました。博士前期課程在籍時はファム・コン・ティエンの文学作品を中心に研究したのですが、その際に彼の文学作品はだ

いたい訳していました。博士後期課程に進んでからは彼の思想もより深く理解したいと考えたので思想関連の著作も主だったものは訳し終えていました。

（聞き手：昨今の出版業界を取り巻く状況を踏まえますと、思想書・文学作品の翻訳書を二冊も出版されたというのは素晴らしいことだと思います。）

それはある意味偶然でもあります、東京外国語大学に着任した後、大学の出版会の業務に加わる機会をいただきました。その際、商業出版では絶対出せないと思った『深淵の沈黙』の出版企画を出しまして、無事企画が通ったというかたちでした。次に、もう少し読みやすい本も出したい、ということで、『文芸と哲学における新しい意識』を翻訳書として出しました。こちらの作品は、『深淵の沈黙』に比べわかりやすいですし読んでいても面白いので、特に若い人、生きることに悩んでしまっているような方々に読んでもらえれば力になるのではないかなということを考えながら出版の準備をしました。しかし、やはり価格の問題もあるので仕方なくもありますが、もう少し広く読まれてもらいたいなとは思っています。

Q. 翻訳書の公刊の他にも、ベトナム語での論文執筆や英語の論集での分担執筆もされています。対象地域の言語で研究成果を発信することはとても大事な仕事であると思います。現地語で発信したときのオーディエンスの反応はどういったものがあるのか、日本（語）で発信する際との違いなどを何か感じたことがあればお聞かせください。

A. ベトナム語で発信することに関していうと、実は『新しい意識』（学会賞受賞作品）のベトナム語版を出していただけました。フェイスブックでベトナム人関係者の方が紹介してくれたりしていますが、学術的な反響というのはまだ今のところはないですね。訳書

は 2023 年に出ましたが、ベトナム国内では出版許可が取れなかったという経緯がありました。現在はそこまで厳しいというわけではないのですが、やはり政治的な事情で許可が下りず、訳書はアメリカで印刷されています。

(聞き手：こういった経緯で翻訳のお話が来たのでしょうか。)

ベトナムや東南アジアを研究している場合、人と人のご縁ができてくるものかと思いますが、ファム・コン・ティエンの弟弟子にあたる人で死刑宣告されたこともあるトゥエ・シーという僧侶の方がおまして、彼はつい最近亡くなってしまったのですが、彼が存命であったころからぜひ出版しようと話を持ち掛けてくれていました。そしてその方の知り合いの尼僧で日本にも留学経験のある女性に翻訳をお願いすることになりました。もう十年以上前からこの翻訳・出版の話はあったのですが、紆余曲折を経て、最近になってやっと出版することができました。本当にありがたいことです。ただ、それが学術的な反響を得ているかという点はまだないかなと思います。

それから英語の論集については、やはり英語でも発表しなきゃいけないのかなと感じてきたことが理由です。ベトナム語や日本語で発表しても得られる反応には限りがあったりする面もあるので、国際学会の機会があれば英語でも積極的に発表していきたいとは考えていました。論集に関していうと、2021 年にドイツのハンブルク大学で開催されたシンポジウムが基になっています。コロナ禍だったのでオンラインになってしまったのですが、発表者も多くいたなかで論集の執筆者として選んでいただいて、論集に加えてもらいました。ファム・コン・ティエンに関するそれまでの研究に新しく調べたことを付け加えて発表したのですが、彼の思想はハイデガーやヘンリー・ミラーとの関係も深いので、そのあたりでも何かしら反応があれば嬉しいなと思っています。

Q. 現在のご勤務先では、ベトナム文学はもちろんベトナム語も教える立場で大学生とも接していらっしゃいます。ゼミでは現代文学だけでなく古典も取り上げていらっしゃるようですが、ベトナム語専攻とはいえ必ずしも全員が思想や哲学に強い関心を持っているわけでもない、そういった場面もあるかと思います。そうした学生に文学を学ぶ面白さをどう伝えていくか、その中で苦労された点や工夫している点などがあれば教えてください。

A. そもそも一般的に小説でさえもあまり読まれないという昨今なので、おっしゃるとおり、どうやって文学に関心を持ってもらうかは難しいところです。学生に興味を持ってもらえるように工夫して話をしていかなければいけない、というのは自分自身の課題ですね。ただ、外国語大学なので学生はやはり語学にはとても関心があります。日本語でベトナム文学のことを話しても興味がなさそうなときもありますが、ベトナム文学史の概説書をテキストとして使って翻訳をしてもらおうと、ベトナム語の読解を兼ねながら、歴史も学びつつ、さらにベトナム文学にも触れてもらうことができます。こういったやり方だと、意外と学生も一生懸命やってくれます。

それから、興味を引き出すという意味では、ベトナムの場合、漢字文化がかなり色濃いですからその共通点について話すことがあります。日本にも漢詩は昔あったでしょうとか、日本でも明治時代ぐらいだと例えば夏目漱石は英語もできたし漢詩も書けたんですよ、といった具合です。同じようにベトナム人も漢籍の素養を持っていましたよと伝統文化の共通するところを挙げて、日本あるいはアジアにいる私たちの伝統文化ということも話します。少し別の例でいうと、グエン・ズーの古典を読んでいたときには、日本語にも共通する漢字文化の伝播について話をしたこともあります。「独壇（だん）場」という言葉がありますけれども、本来この単語は漢語では「独擅（せん）場」と書くようです。本当は後者

が正しいようで、実際にグエン・ズーの漢詩には「独擅場」と出てきますので、それを学生に示したりしました。あとは、「般若」のような仏教用語の多くは、漢字の字義だけでは意味がわかりません。それはこの単語が元々サンスクリット語の「プラジュニャー」という言葉の俗語形の音訳だからなのだと説明します。そしてそのプラジュニャーの意訳は「智慧」であり、英語では wisdom と訳されている言葉であることや、さらにはプラジュニャーと英語の know は共通の語源に遡れることなども話します。こういったように、私たちがなんとなく知っている単語レベルのことで、そこから世界の広がりやイメージができるよう工夫しているつもりです。

Q. 受賞作やその後の翻訳書の内容にも関係しますが、思想や哲学に関する内容を翻訳していくとき、西洋近代的な体系や概念枠組にからめとられずにどのように表現していくのか、というところにすごく難しさがあると感じます。現地語で表現される世界観や認識をどう書いていくかという課題は本学会会員の多くが直面するものでもあるかと思うのですが、野平先生ご自身がベトナム語を翻訳する際やご研究される時に、どのように向き合っているのか、気を付けておられる点などについてお聞かせください。

A. ベトナムの場合と他の東南アジア地域では違いがあるかと思いますが、ベトナム語の翻訳の場合、漢語起源の言葉の場合にはそのまま漢字に置き換えることができます。ファム・コン・ティエンの場合だと、「ティン tính」という独自の哲学用語を使うのですが、これは「性」という漢字に対応しています。ファム・コン・ティエン自身はこうした語に特殊な意味を持たせて哲学的考察をしていくのですけれども、翻訳ではそのまま「性」で示すことができます。ベトナムの固有の言葉についてはカタカナでそのまま書いて、後は細かく説明を加えていくというようなかたちでしょうか。一つの単語で翻訳してしまうのでは

なく、説明的な翻訳するとか、そんなことでもいいのかなというように思います。

西洋近代概念に囚われずという点については、私自身というより受賞作で取り上げたファム・コン・ティエン自身がやはりすごいと感じます。ハイデガーの思想の鍵概念に「Sein ザイン」（英語の Being に相当）という概念があり、一般には「存在」と訳出されます。ところが、ティエンはこの「Sein」はどう訳していいわけでもないのだと主張しました。ハイデガーの哲学と東洋の思想とが対話するためには、単純な翻訳を超越するような深く考えられた翻訳が必要だということを主張したわけです。そしてその際に、仏教思想との対話を目指してゆき、最終的には英語の「being」と共通の語源を持つサンスクリット語まで遡って考えました。そのサンスクリット語は「bhāva」という語彙なのですが、これがどのように漢語で訳されているかを調べ、ティエンはその中の一つである「性」という言葉にたどり着きました。重要なのは、これが本当に妥当な訳なのかということよりも、他の漢字文化の地域であれば「存在」という定訳があるなかで、それに対して一石を投じるような翻訳に取り組んだ事実だったのではないかと思います。「存在」という語彙自体が近代以降の翻訳語であって、日本語でもベトナム語でも、英語の be 動詞のように日常的な語彙の中にある言葉ではありません。文法的な対応よりもハイデガーが「Sein」に込めた意味をくみ取りつつ根源的な対話をするのだといって語源まで遡って翻訳にあたったということは一考に値することです。新たな翻訳によってまた新しい議論の可能性が出てくるということをティエンの著作から感じます。

ベトナム語の翻訳での苦労としては、言語表現に地方差があることです。ベトナムだと北と南で同じ単語でも意味が異なる場合があります、そういったことは辞書で調べても正確にはわからないこともあります。文学作品のなかにそういったものが出てくると、理解するまでに苦労します。ネイティブのベトナム人に訊いても、南部のことについては北部出身

の人はあまりよくわかっていないこともあります。日常会話や俗語表現は文学作品の翻訳をしていくうえでは難しい部分ですが、そういった表現を作品をつうじて学ぶことができるというのは、ベトナム語を学ぶうえでは良いことだと思います。

Q.文学を通して対象地域を理解する、あるいは文学を通して地域研究をしていくことの醍醐味や面白さをぜひ教えてください。

A. 質問の意図からは外れてしまうかもしれませんが、私の場合は、文学を通して民族なり国なりといった大きな集団について考えたり研究したりといったことはあまり意識していません。まずは作品そのものが楽しい、あるいはその著者が生み出す創作物というのがこんなにも魅力的で興味深いのだということで、その素晴らしさを紹介したくて研究をつづけている面があります。それが結果的にベトナムあるいは東南アジアへの理解に何かしらのかたちで寄与するのであればそれも良いなという心持ちで研究しています。あるいは、私たちが持っている典型的なベトナムないしは東南アジアのイメージに対して、詩人なり作家が書いた作品がそうしたイメージを揺さぶる、または異なるイメージを突きつけるのであれば、そういったこともあってもいいかなというように考えて研究しています。ファム・コン・ティエンの場合は、ベトナム戦争当時、世界中で起きたベトナム反戦運動に対して、非常に極論であり逆説的な方法ではあると思いますけれども、「ベトナムに平和を求めないでくれ」と言ったわけです。当時のベトナムを生きた彼からすれば、欧米の人たちというのはベトナムを平和の対象としているに過ぎない、つまり、西洋という主体（サブジェクト）があってその客体（オブジェクト）としてベトナムを捉えることで彼らの都合のいいように（たとえそれが平和の希求であっても）ベトナムを我有化し続けているのだ、そういうことに対する拒絶があったと考えられます。平和を求めるベトナムという当時の

一般的なイメージに抗い、徹底してひとり思い悩みそれを思想にまで昇華させた彼の姿勢に惹かれた面もあります。そういった個々の作品の面白さや魅力を伝えていきたいという思いが強いです。

同じような考えで、最近では別のベトナム人作家の作品の翻訳——『絶縁』（小学館、2022 年）——にも取り組みました。その作品の主題は、現代ベトナムにおける家族関係の問題でした。家族の在り方という現代社会を象徴するようなテーマですが、日本と同じ面もあれば、もちろん違う面もあります。その二つの側面なども、作家が描き出す独自の作品世界の面白さを通じて伝えていければと考えています。

Q.（現在、あるいは将来に下記の課題に直面する大学院生・若手研究者向けに）博士論文執筆、およびそれを基にした単著刊行以降の新たな研究テーマの見つけ方について、ご自身のご経験を踏まえたアドバイスをお願いいたします。

A. 自分の経験のことしかいえないのですが、私は博士論文まではファム・コン・ティエンという一人の人物について深く調べてきました。それが一段落して、彼についてはまだやり残したことがありますので、それらの点について引き続き研究を深めていきたいというのが、まず一つめですね。そしてそこから思うこととしては、一つの研究対象があったとして、そこから円のように広がっていくイメージで研究の幅を広げていくと良いのかなと思います。私の場合は、ファム・コン・ティエンが称賛していた古典文学のグエン・ズーや、ハン・マック・トゥーという 20 世紀前半の詩人がいるのですが、彼らについても論文を書いています。このように、一つの対象があり、そこを軸にしながら関心を広げていきました。そうやって広げながらやっていると、グエン・ズーという 19 世紀の詩人がいて、次に 20 世紀前半の詩人がいて、そして、20 世紀後半のファム・コン・ティエンがいる。

さらには、ファム・コン・ティエンの影響を受けたような現代の詩人もいるというように、一つの系譜のような流れも次第に出来上がっていくのかなと思います。研究関心の広げ方の別の例でいうと、私の当初の関心はファム・コン・ティエンだけでしたが、南北分断期の南ベトナムの文学の研究ももっとやらなければいけないと思っています。当時活躍していた優れた作家や詩人が多くいるのですが、ベトナム国内ではいまだに政治的な事情のために制約があり、なかなか研究がすすんでいない分野でもあります。そういった国内の事情があるなかで、海外の研究者だからこそできることがあるのかなとも考えています。あとは、ファム・コン・ティエンの思想は仏教をベースにしていますので、彼が生きた南ベトナムにおける仏教運動などの歴史背景や文学作品を取り巻く周辺の事情も調べていきたいとも考えています。個人的な研究の話になってしまいましたが、こういったように一つの点から研究関心の円をどんどん広げていくと、それが次第に歴史的にもつながりを持っていくのではないかと思います。

あとはこれも個人的な所感になってしまうかもしれませんが、あまり最新の理論とか理論的な枠組みから事象を捉えるというのは薦められないと研究を志す学生には伝えていきます。そういった手法だと理論でもって研究対象を歪めてしまうこともあるのかなと思われるためです。ファム・コン・ティエンの場合ですと、かつては北側の政治的なイデオロギー的な見方で批判されていたこともありましたが、でも、そういった政治的な見方を抜かして彼の思想に接近してみると、やはり時代が変わっても消えない魅力があります。ある時代の特定の見方だけに依拠して理解しようとするのは少し危険なのではないかと思います。そういった特定の理論なり枠組みなりに縛られずに、自分にとって魅力あるものなら、その事象そのものの魅力がありのままに現れてくるような記述、論述を心がけていく、そういう姿勢が大事になると考えています。

短報

“Korea-Japan Conference of Southeast Asian Studies 2024: Searching for Southeast Asian Powers and Wisdom in the Turmoil World”に参加して

菊池泰平 (京都大学)

韓国東南アジア学会 (以下、KASEAS と表記する) と、京都大学東南アジア地域研究研究所 (以下、CSEAS と表記する)、日本東南アジア学会 (以下、本学会とする) らの共催で、“Korea-Japan Conference of Southeast Asian Studies 2024: Searching for Southeast Asian Powers and Wisdom in the Turmoil World”が、2024 年 8 月 31 日に開催された。会場は、釜慶大学校大淵キャンパスであったが、台風 10 号の通過に伴い多くの日本側参加者はオンラインでの参加となった。

この会議は、インドネシアの労働問題を専門とする水野広祐会員 (CSEAS 名誉教授) と、KASEAS 現会長の Je Seong Jeon 博士 (全北大学校教授) の学術交流がきっかけで開催されるようになった。2009 年に KASEAS 側が CSEAS の研究者を韓国に招待して以降、日韓双方が交互に招待し合う形式で、隔年で開催されてきた。

2019 年からは、若手研究者どうしのさらなる交流を促進するため、年次開催へと変更された。新型コロナウイルス感染症の流行のため、2021 年と 2022 年はオンラインの開催であったが、2023 年には京都大学で現地開催され、今年度は韓国が会場となった。今年度の大きな特徴は、本学会が共催機関として加わったことである。

今回の日韓合同会議には、本学会の会員を含む日韓のベテランと若手が参加した。対面での参加者は 41 名で、この中には水野広祐会員の他、インドネシア人 6 名、イタリア人 1 名も含まれていた。また、オンラインで 18 名が参加した (この中には、本学会の長津一

史会長、三重野文晴会員、岡本正明会員、下條尚志会員、中島咲寧会員、中野真備会員、明星つきこ会員、筆者を含む)。

本学会の長津会長による基調講演に続き、5 つのパネルで全 16 件の研究報告が行われた。全体的に、東南アジアの社会や政治、経済、文化など多岐にわたるテーマが扱われており、非常に興味深かった。特に、現地語を用いた研究発表が多く見られたのが印象的であった。

第 1 パネル「ディアスポラ、インターフェース、交渉：海の民の視点から東南アジアのダイナミズムを理解する」では、南スラウェシのコンジョ船大工の移動性と流動性、バンガイ諸島のサマ・バジャウの漁業活動と移動性、メコン川流域の民族の混成性・社会の流動性・非公式的な経済、マレーシアのタミル系イスラム教徒移民のディアスポラの視点からみた海上ネットワークの形成について、4 名の登壇者が研究報告を行った。

第 2 パネル「ソーシャルメディア、言説の創造、社会変革」では、2024 年インドネシア大統領選挙における TikTok の利用に関する研究、2021 年のクーデター後、ミャンマーの反国軍派が使用したネットや SNS を通じた資金調達に関する報告が行われた。このパネルで筆者は、ミャンマーの国民統合をめぐる歴史認識についての報告を行った。

第 3 パネル「金融、投資、政治経済」は、ラオス経済について実物部門の成長・対外資金調達の特性・国内金融システムから分析した報告、デジタル投資と技術協力をめぐるインドネシア＝韓国間の関係についての報告、ベトナムの経済発展と政治システムの刷新に関する報告の 3 つから構成された。

第 4 パネル「権力、知識、歴史」では、インドネシア先住民が有する災害に関する知識についての報告、インドネシアにおけるモダニティや近代化の概念に関する報告、冷戦期タイをめぐる歴史認識についての報告が行われた。

第 5 パネル「分裂と区別：アイデンティティをめぐる政治」では、ジャカルタにおける

ゲーテッド・コミュニティと社会政治的態度の関係についての報告、マルク州バンダ諸島のチュチ・パリギ儀式を事例として先住民と移民の人口間の力関係の解明を試みた報告、韓国の厳格な移民政策がタイの韓国に対する認識に与える影響と、それがタイ国内の社会のおよび経済的な区別をどのように強化するかに関する報告が行われた。

このように、さまざまなディシプリンやフィールドを架橋して、本研究会議は進められた。全体的な傾向として、変化を続ける東南アジア社会で生じている種々の困難と、それへの対処法に問題関心の比重が置かれていた。例えば、特に筆者の目を引いたもので言えば、ミャンマー政変後に反国軍勢力の組織した国民統一政府(NUG)を中心とする資金調達がいかに行われているのかという発表が挙げられる。この中では、反国軍勢力が限られたリソースの中で実施した、オンライン決済システムの運営、映画のチャリティ上映会、バーチャルな不動産売買について言及された。テーマの性質上、これに関わる人やモノの詳細(例えば、アプリの開発者やサーバーの場所など)を明らかにするのは難しい。しかし、日本を含む国外で暮らす在外ミャンマー人が、こうしたサービスを利用することにより、NUGの資金調達が支えられていることが指摘された。

今回の学会参加を通して、東南アジア研究の多様性と可能性を改めて認識することができた。特に、現地語を駆使した研究の重要性を強く感じ、今後の自身の研究活動にも積極的に取り入れていきたいと考えている。また、日韓の研究者間の交流を深め、共同研究などを進めていくことも重要であると感じた。

唯一、残念であったのは、現地の会場に足を運ばなかったことである。これまで先輩方から、韓国の東南アジア研究が活発であるという話を繰り返し耳にしていたので、現地を訪れて学界の雰囲気を味わうことを楽しみにしていた。今後、対面での学術交流が叶うことを期待したい。

短報

国際会議“The 13th International Convention of Asia Scholars (ICAS): Crossways of Knowledge”に参加して

中島咲寧 (京都大学大学院)

2024 年 7 月 28 日～8 月 1 日の日程で、国際会議 “The 13th International Convention of Asia Scholars (ICAS): Crossways of Knowledge” が開催された。同会議は、オランダのライデンに拠点を置く国際アジア研究所 (International Institute for Asian Studies, IIAS) を事務局とし、アジアに関わる研究者や研究機関の学際的な交流の場を提供している国際学会である。13 回目の開催となる今大会は、国立アイランガ大学 (Universitas Airlangga)、及び同大学のインド洋クロスロード研究所 (Airlangga Institute of Indian Ocean Crossroads, AIIOC) の主催により、インドネシアのスラバヤにて開催された。

本会では「知の交差点」がテーマに掲げられ、2023 年に同大学に新設された機関である AIIOC の主導のもと、世界各国から集まった約 1500 人ものアジア地域の研究者たちによる分野や地域を超えた活発な交流や議論が行われた。特筆すべきは、今大会が Conference-Festival というコンセプトに基づき、開催地であるスラバヤが有する歴史・文化的な資源を活用しつつ、アカデミアと市民社会や芸術との垣根を超えた交流を目指す多様な催しを用意していたことである。研究者によるパネル発表やポスター発表に加えて、東ジャワにおける伝統的な舞踊や楽器の公演、若手のアジア研究者らによる独創的な展示、アジア関連の映画上映といった様々なイベントが全日程を通して行われ、会場はまさに「お祭り」のような賑やかな雰囲気に包まれていた。参加登録時に配布されたパンフレットには歴史ある港町として栄えてきたスラバヤという地域の歴史や文化に関する紹介や主要な観光名所のマップなども掲載されており、本会の参

加者たちをスラバヤという地域と結び付けようとする主催者側の姿勢が読み取れた。また、英語、中国語、日本語、仏語、独語、韓国語、ポルトガル語／スペイン語の各言語における出版物を対象に優れた書籍を表彰する ICAS Book Prize も行われた。日本語出版物の部門では、本学会の下條尚志会員 (神戸大学) の著書、『国家の「余白」－メコンデルタ 生き残りの社会史』(京都大学学術出版会、2021) が受賞した。

今大会では、①不均衡な地理、生態、技術と人類の未来 (Uneven Geographies, Ecologies, Technologies and Human Futures)、②海の交差点、帝国、ネットワーク、歴史 (From Oceanic Crossroads, Empires, Networks, and Histories)、③繁栄、成長の痛みとそのガバナンス (Prosperity, the Pains of Growth and its Governance)、④周辺、国家、コミュニティ、人の移動からの視点 (Seeing from the Neighbourhood, States, Communities, and Human Mobility)、⑤知識の伝達－制度、モノ、実践 (Transmitting knowledge: Institutions, Objects, and Practices)、⑥芸術、メディア、文化の使用－対立と協働 (Using the Arts, Media and Culture: Contestations and Collaborations)、⑦複数の存在論－宗教、哲学、言語と社会 (Multiple Ontologies: Religiosities, Philosophies, Language and Society)、⑧周縁における交渉－表象と抵抗、主体性 (Negotiating Margins: Representations, Resistance, Agencies)、⑨新たな食の景観－栽培、生活、美食学 (Emerging Foodscapes: Cultivation, Livelihoods, Gastronomy)、⑩身体の癒し－医療、健康、スポーツ (Healing Bodies: Medicine, Well-being, Sport) という 10 のクラスターが設けられ、パネル・ポスター発表者がその内容に近いものを一つ選択するという形式であった。パネル発表では、統一されたテーマに基づき各発表者が専門とするアジア地域について報告する形式が主流であり、各地域の比較検討から全体を通して一つのアジア像が浮かびあがるという構成のも

のが多かった。また、同一テーマを連続する2つのパネルに分けて論じるという構成のものもあり、そうしたパネル発表においては特に、各パネルの発表者間で非常に活発な議論が見られた。

未だ国際学会への参加経験が乏しい筆者にとって、本学会の規模の大きさと多様な催しは、良い意味で期待を裏切られるような体験であった。また、自身の研究分野に関連する最新の動向を世界各国から集まった研究者の発表をつうじて直接目にすることができたことは、自身と世界各地の研究者との結びつきや広がりを実感させる刺激的な経験であり、大きな励みとなった。

追悼

「林行夫先生 追悼集会」

小林知 (京都大学)

林行夫先生は、2022 年 7 月に御逝去された。満 66 歳の突然のお別れであり、多くの会員が驚いたことと思う。教え子である私も例に漏れず、その報を受けて呆然とした。それから 2 年が経とうとする今年の初めに、村上忠良さん (大阪大学) が口火を切る形で有志が集まり、林先生を偲ぶ会を実施する計画とその準備が始まった。

林先生は、1988 年に国立民族学博物館に就職された後、1993 年に京都大学東南アジア研究センター (当時) へ異動した。そして 2017 年には龍谷大学文学部歴史学科へ移られた。追悼集会は、龍谷大学のかつての林研究室のすぐ近くの大会議室を場所とし、2024 年 9 月 30 日に、約 70 名の参加者を集めて行われた。追悼集会は、『林行夫先生の研究を振りかえる会』と『林行夫先生を語る会』の 2 部構成であった。

前者では、5 名が登壇し、林先生の研究者としての歩みを 3 つの時期に分けて確認・批評した。福井捷朗先生 (京都大学名誉教授) と村上忠良さんによる「(1) 東北タイ農村の仏教実践と地域社会史」では、修士課程でジンメルを中心に社会学を研究していた先生が、口羽益生・石井米雄先生との出会いを経て、1981 年にタイ留学へ出発し、東北タイでの定着調査に進んだ歩みを確認した上で、初期の研究を振り返った。主著『ラオ人社会の変容と文化変容—東北タイの地域・宗教社会誌』

(2000 年) や、民博時代に書かれた論文「ダルマの力と帰依者たち—東北タイにおける仏教とモータム」(1989 年) を中心に、Stanley Tambiah などの先達の研究を批判しつつ、農学や生態学の知見も用いて展開した、林先生

の東北タイ地域と仏教実践についての研究が再検討された。

「(2) 西南中国・大陸部東南アジアにおける宗教と社会の変容」では、長谷川清先生 (文教大学) と私が登壇した。長谷川先生は、冷戦構造の雪解けと共に 1990 年代初頭から林先生がエネルギーに展開した、タイの隣接国・地域を対象とした地域間比較の共同研究を振り返った。特に、民族間関係や宗教文化をテーマに、1998~2002 年にチェンマイ、昆明、チェンライ、ルアンパバーンで実施した国際セミナーが、在野を含むローカルな知識人・研究者を招へいし、ヴァナキュラーな地域の文脈を重視していたことの意義が改めて確認された。続いて、私は、2006 年以降 10 年ほどの間林先生が取り組まれた、地域情報学を方法とした東南アジアの上座仏教徒社会の寺院と出家者の時空間マッピングの取り組みを再検討し、その到達点と残された課題について述べた。

「(3) 日本と東南アジアの仏教交流研究」では、タイやスリランカに明治期以降に渡航した日本人仏教僧侶が残した史資料の検討を通じて、林先生が 2010 年代後半から展開した歴史研究を、中西直樹先生 (龍谷大学) が紹介した。日本仏教のアジア観を批判したその歴史研究は、他者を理解するという、我々の日常に深く関わる行為に潜む課題を、改めて、鋭く、指摘するものである。

続く『語る会』では、入澤崇先生 (龍谷大学学長) をはじめとして、元同僚 (加藤剛、速水洋子、柳澤雅之)、京大時代の元ゼミ生 (兼重努、王柳蘭、小島敬裕)、音楽仲間 (馬場雄司、寺岡道宏)、そして龍谷大学で教えを受けた学部卒業生が登壇し、林先生の思い出を述べた。気難しい側面があり、激しい気性ながら、愛情溢れた人柄であったこと。反権力を一貫として信条としたこと。職場の事務方の職員から高い人気があったこと。絵を描き、ローリングストーンズを愛して、研究者以外

の表現も追求したこと等々。

冷戦下の 1980 年代初頭から新型コロナウィルスの感染拡大の時期まで、全力で、タイ研究・東南アジア研究を独自の視点から力強く切り拓いた林行夫先生の歩みと、それが成し遂げたことを想起し、渡されたバトンの価値と重さを仲間と共に考えた、貴重な時間であった。

地区活動報告

各地区例会は、対面のみ、またはハイフレックス形式で開催した。2024 年 4 月～2024 年 10 月の活動状況は以下の通りである。また、8 月は東南アジア学会初の試みとして、12 月の学会研究大会企画 Open SEA への参加を促す、高校生・大学生対象「東南アジア学セミナー」を開催した。

北海道・東北地区

2024 年 6 月 1 日 (土)

会場：東北学院大学 土樋キャンパス 政策デザイン学科共同研究室 (総合研究棟 3 階) + Zoom (ハイフレックス)

第 1 報告：西川慧 (石巻専修大学)

「石巻市におけるインドネシア人移住労働者受け入れの特徴—沿岸漁業と水産加工を中心に—」

コメント：一條玲香 (尚絅学院大学)

第 2 報告：石川真作 (東北学院大学)

「塩釜国際交流協会の活動と東北学院大学学生の関わり」

コメント：長津一史 (東洋大学)

関西例会

2024 年 6 月 29 日 (土)

会場：京都大学吉田本部キャンパス 総合研究 2 号館 4 階 第 1 講義室 (AA401) + Zoom (ハイフレックス)

報告者：大橋厚子・柳澤雅之 (京都大学) (共同発表)

「東南アジアの中央政権と地域住民の間—歴史学と歴史人類学の協力、およびツール紹介—」

コメント：片岡樹 (京都大学)

中国・四国地区

2024 年 10 月 12 日 (土)

テーマ：「東南アジアの都市における統治性とその変容」

会場：広島大学東千田キャンパス未来創生センター M302 (対面のみ)

第 1 報告：藤原尚樹 (広島大学大学院人間社

会科学研究科 特別研究員 PD)

「『清潔と緑』の都市政治—フィリピン・パシッグ川の都市環境統治性に着目して—」

コメント：太田和宏 (神戸大学)

第 2 報告：久納源太 (京都大学 東南アジア地域研究研究所 機関研究員)

「監視カメラに見るジャカルタにおける監視の複合性」

コメント：吉田航太 (静岡県立大学)

九州地区

2024 年 9 月 28 日 (土)

公開研究会「ミャンマーからタイ、マレーシアへの移動者の諸相」

会場：九州大学 西新プラザ 多目的室 + Zoom (ハイフレックス)

第 1 報告：水野敦子 (九州大学)

「マレーシアにおけるミャンマー人労働者—正規と非正規を跨ぐ移民システム—」

コメント：篠崎香織 (北九州市立大学)

第 2 報告：生駒美樹 (東京外国語大学)

「チェンマイ在住のパラウン(タアン)人コミュニティに関する中間調査報告—シャン州チャウツマー県 H 村出身者を事例に—」

コメント：藤田幸一 (青山学院大学)

東南アジア学会関西例会特別企画

高校生・大学生対象「東南アジア学セミナー」

主催：関西例会

共催：大阪大学外国語学部東南アジア 5 専攻

会場：大阪大学 箕面キャンパス 外国学研究棟 1 階大講義室、大阪外国語大学記念ホール + Zoom (ハイフレックス)

2024 年 8 月 1 日 (木)

第 1 講義：池田一人 (大阪大学)

「東南アジアのあらましと今回の講義」

第 2 講義：小林知 (京都大学)

「何をどう食べるのか？—食から考えるカンボジアの環境・社会・文化—」

第 3 講義：師田史子 (京都大学)

「フィリピンの闘鶏における人間・動物・植民地主義の絡みあい」

第4講義：中西嘉宏（京都大学）

「戦うか逃げるか留まるか、君はどうする—東南アジアの紛争を考えよう—」

第5講義：伊藤友美（神戸大学）

「目に見えない宗教的経験にアプローチするには？—タイで流行りの仏瞑想修行と『富のカルト』を題材に—」

第6講義：長津一史（東洋大学）

「ナマコがつくる世界—東南アジアの海民と共生の技法（アート）—」

2024年8月2日（金）

第1講義：清水政明（大阪大学）

「東南アジアのインド系文字と五十音図の意外な関係」

第2講義：菅原由美（大阪大学）

「インドネシアの若者とイスラーム—穏健？保守化？—」

会員情報

事務局より

1. 学会誌『東南アジア—歴史と文化—』の電子アーカイブ化について

1 号から 51 号までの学会誌について、下記 URL にて電子アーカイブが公開されておりますので、よろしくご利用下さい。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sea/-char/ja/>

2. 会員情報の変更届について

転居や就職などで会員情報の登録内容に変更がある場合や退会する場合には、すみやかに以下の要領で変更手続きをとってください。

(1) 変更届けの提出

学会ウェブサイトを利用する場合、学会ウェブサイトの「会員登録の変更・退会届」のページで変更のある項目を入力して送信してください。電子メールを通じた届けでもかまいません。

Fax や郵便を利用する場合、次ページの「変更・退会届」をコピーして該当事項を記入し、東南アジア学会会員管理係に送付してください。

(2) 会員メーリングリストの登録アドレス変更

メールアドレスを変更した場合、上記の変更届と別に会員メーリングリスト (SEAML) に登録したメールアドレスの変更を行う必要があります。学会ウェブサイトの「東南アジア学会メーリングリスト SEAML 案内」の「登録変更ページ」で旧アドレスを解除した後、新アドレスの登録を行ってください。

* 退会する場合にはメーリングリストの解除も忘れずをお願いします。

3. 学会からの連絡を郵便で受け取りたい場合

本学会からの連絡は基本的にすべて会員メーリングリスト (SEAML) を通じて行っています。郵送による連絡を希望する会員は、「郵送希望書」の提出と、会費と別に郵送手数料 (年間 2000 円) が必要となります。

退会以外の理由で SEAML から登録アドレスを解除する場合、「郵送希望書」を提出していただかないと学会からのお知らせが届かなくなりますのでご注意ください。郵送を希望する場合は、次ページの「郵送希望書」に必要事項を記入し、東南アジア学会会員管理係に送付し

てください。同じ内容が記載されていれば電子メールによる連絡も受け付けます。

* なお、郵送手数料は当該年度の会費とまとめてお支払いくださるようお願いします。

4. 入会手続きについて

本学会への入会には本学会の正会員 1 名の推薦が必要です。入会を希望する方は、学会ウェブサイトから入会申込書を入手して必要事項を記入し、推薦者の署名を受けた上で、東南アジア学会会員管理係に送付してください。

5. 学会ウェブサイトについて

本学会の諸規程、研究大会案内、地区例会案内などについては学会ウェブサイトをご覧ください。なお、2018 年 5 月より学会ウェブサイトは刷新されました。

6. 研究大会の報告者募集について

詳細は 5 月にお送りする研究大会予報をご覧ください。

7. 旅費の補助について

研究大会で研究報告を行う若手会員の旅費の一部を補助します。該当者は研究大会での報告が決まったら大会理事にお問い合わせください。

8. 会誌への投稿について

会誌『東南アジア 歴史と文化』への投稿を希望する方は、学会ウェブサイトにある投稿に関する諸規程をご覧ください。

9. 会費について

年会費は、一般会員 8000 円、学生会員 5000 円です。振込先は以下の通りです。

郵便振替口座 00110-4-20761 東南アジア学会

なお、郵便局以外の金融機関からの振込みの場合は、以下の口座宛にご送金ください。

口座名「東南アジア学会 (トウナンアジアガッカイ)」

店名「〇一九 (ゼロイチキュウ)」

店番「019」 口座種別「当座」

口座番号「0020761」

東南アジア学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2 アジア経済研究所
長田紀之研究室

Email: jsseas@ml.rikkyo.ac.jp

URL: <http://www.jsseas.org/index.html>

会員情報係

(株) 京都通信社

〒604-0022 京都市中京区室町通御池上ル御
池之町 309 番地

TEL 075-211-2340

FAX 075-231-3561

Email jsseas-db@ml.rikkyo.ac.jp

この用紙に必要な事項を記入のうえ、会員管理係に FAX または郵送でお送りください。

(学会ウェブサイトからの変更・退会届提出も可能です)

会員情報係：(株) 京都通信社 〒604-0022 京都市中京区室町通御池上ル御池之町 309 番地

Tel: 075-211-2340

Fax: 075-231-3561

E-mail: jsseas-db@ml.rikkyo.ac.jp

住所等の変更・退会届

名前：

☐ 下記の通り会員登録を変更します

現住所：

所属：

職名：

所属先住所：

メールアドレス：

専攻：

研究課題（追加の場合もすべて列挙してください。但し 3 つまで）：

その他の変更：

☐ 退会届

年 月 日をもって東南アジア学会を退会します。

署名：

* 会費滞納者の退会は認められませんので、ご注意ください

郵送希望書

学会からの連絡は郵送にて下記の住所に送ってください。

* どちらかにチェックを入れてください。

☐ 一般会員（会費+郵送手数料=10000 円）

☐ 学生会員（会費+郵送手数料=7000 円）

名前：

あて先：

東南アジア学会会報 第 121 号
2024 年 11 月発行

発 行 東南アジア学会事務局（会長 長津一史）
編 集 東南アジア学会事務局（総務 長田紀之）
所在地 〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
アジア経済研究所 長田紀之研究室
Email jsseas@ml.rikkyo.ac.jp
URL <https://www.jsseas.org/>
郵便振替 00110-4-20761 東南アジア学会
